

はじめに

淡路島の農業は、温暖な気候や京阪神など消費地に近い立地条件を生かし、三毛作体系によるたまねぎ、レタス、キャベツ等の露地野菜栽培を中心に発展してきました。

兵庫県下の農業産出額に占める割合は26.3%、また、これらの農業を支える認定農業者の数も兵庫県下の42%を占めるなど、淡路島は最も農業が盛んであり、いわゆる農業で家族を養うことができる地域といえます。

ただ、このような淡路島でも高齢化や後継者不足により、年々農業者の数が減少しています。それにともない過疎化が進み耕作放棄地が増え、農業はもとより農村集落の維持が困難な地域も出始めています。

このようななか、ここ数年、国の新規就農を促す施策の効果もあり、農外から新たに農業を志す新規就農者が増えてきました。

その多くの方は住居をはじめ農地や農業機械、技術も持たないゼロからのスタートのなか、一生懸命に頑張って農業に取り組み、淡路にしっかりと基盤を築いている方もいますが、なかには生計を立てることがかなわず、走し半ばに農業をあきらめる方もいます。

淡路島の農業の持続的な発展を考えると、新規就農者の支援と合わせ、認定農業者をはじめとする農家の子弟のUターン就農を推進することが重要ではないかと考えました。

農家の子弟であれば、淡路島に帰れば住む場所も農地も農業機械もあり、地域の人も習慣も知っています。また、親族からの技術の伝承も可能で、農外からの就農者と比べると超えなければならない壁は低く、将来、淡路島の農業をしっかり支える農家となることが見込まれます。

このようなことから、淡路の農業が産業として、また職業としても十分に魅力のあることを子弟に認識してもらい、30、40歳で人生を考えると、「淡路に帰って農業をするのもいいか」と、選択肢の一つにしてもらいたい。そして1人でも多くの方にUターン就農をして欲しい。このような思いを込めてこの冊子を作成しました。

この冊子には、7名の“Uターン就農の先輩”が登場します。就農したきっかけや農業への思いは十人十色ですが、みなさん生き生きと農業に取り組み、淡路島の農業を支えています。

子供が農業を継ぐ、家を継ぐというのは、親にとって、家族にとって、あるいは地域にとっても、こんなうれしいことはありません。

ふるさと淡路島に帰って農業をせんかよ！

ふるさと淡路島に帰って農業をしよう実行委員会